

いわかづみ

令和四年九月 第九〇号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(9)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑦ランマ)
- ◇ 方言一考(くつちえ)
- ◇ モノ言うもの(戦没者銘板)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(9)

へ女川左岸段丘の開拓者たちの系譜①

渡辺 伸 栄

関川村の盆地の底から、朝日連峰の主峰大朝日岳を拝める場所が、ただ一か所だけあります。

会友の石山キンさんは、幼少時、朴坂から女川小学校へ通う道で、秀麗な三角形のその山を仰ぎながら、あの素敵な山はこの山だろうと、あこがれを抱きながら歩いたと言います。きっと、そのあこがれが岳女を育てたのでしょ。

宮前の女川橋のたもとのあたりから見える大朝日岳の白嶺は、神々しくさえあります。

大朝日岳が

ひよっこり姿を現す谷間。

光兔山の北側尾根が緩やかに下がって藤沢川に落ち合う、ちよどその場所が田麦掘割の現地です。

女川に合流するはずの藤

沢川の水を、強引に門前川へ流そうとして分水嶺を掘り割った場所。文化三(一八〇三)年、小見村の庄屋平田平太郎が江戸幕府勘定奉行所へ一大訴訟を起こすことになった原因の地がそこです。

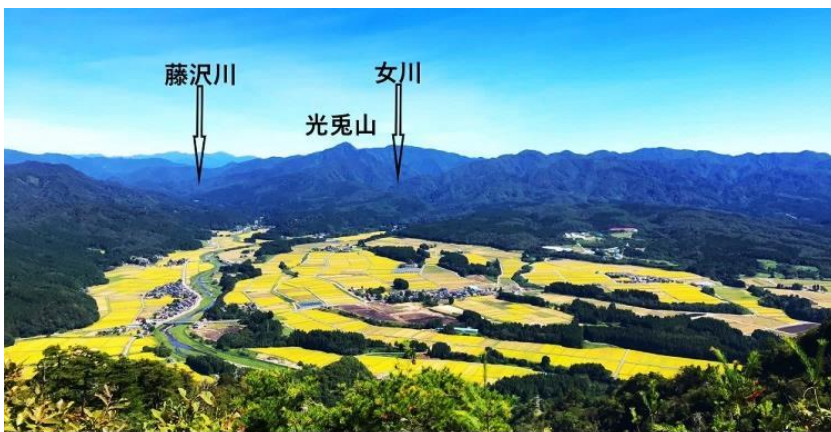
地図で位置関係を見れば誰しも不思議に思うのですが、小見村の平太郎が藤沢川の水を欲しが理由がないのです。

郷土史の先学たちも、それが分からず、この事件の真相をつかみ損ねていたようです。



実は、私も、一通りこの事件を調べ終えたときは、理解できていませんでした。長く女川組(旧女川村地域)を束ねてきた平田家の意地みたいなんだろうと結論付けて調査をまとめ、幾人かの方々に印刷物にして配布したものです。

その後は、女川左岸段丘開拓の歴史調査に移りました。新堀用水の開削に深くかわつたはずの安久鉄次郎が、「関川村史」のその用水関係の記述に、一切出てこないことを疑問に思っていたからです。



女川左岸段丘上に広がる美田 2021.9.20 朴坂山山頂から撮影

調べ始めてみると、女川左岸段丘の手つかずの大地開拓を夢見た様々な人々の存在が見えてきました。

やがて、ふと、平太郎もその一人だったのではと、思い当たったのです。

実は、田麦掘割の裁判記録に、理解できなくて、そのまま放置してきた場面がありました。

御白州で平太郎が勘定奉行に尋問され、「藤沢川の水を取られては、高所の水が足りなくなつて、先祖より所持してきた野地が開発できなくなる」と述べた場面。そして、その日の後刻、村上藩屋敷で藩の役人が、「御白州で平太郎が言った『上野』は、過去七度の願人があったが新田にできなかった所だ」と述べた場面。

私には、平太郎の言葉の意味が理解できませんでした。だから、藩役人の言う『上野』が、田麦掘割とどう関係するのかも、まったく理解できなかったのです。配布したまとめの文章には、この箇所について「理解不能」と書いて、そのままにしてありました。

もしかしたら、あの場面の『上野』は、左岸段丘の高台のことなのではないか。そう思いついて、再度調べ直してみました。すると、「関川村史」に、平太郎の先祖が上野新村を

開発したとの記述が見つかりました。霞がとれたような気がしました。

御白州で平太郎が述べたのは、こういうことだったのです。

「自分は、左岸段丘の高台を何とか開拓したいと思つている。そのためには、女川の上流部から水を引く必要がある。そうすると、下流の水が不足する。それを補うためには、藤沢川の水が必要なのだ」と。

不思議なことに、村上藩は、平太郎の言葉の意味を理解していたのです。そして、尋問した勘定奉行も承知していたようです。

みな、実現には相当の困難があることは分かつたうえで、しかし、あそこが開拓されたらすごいことになるということとは思つていたのでしよう。江戸の勘定奉行でさえ。

結局、平太郎の大願は実行されていません。願人堀が完成して段丘の下段部に水田が開発されたのは、五十年後の安政年間です。

その後、明治になって、坂口、松永、田村の三名が、上流に新堰の用水路を計画。紆余曲折の末、大正七年、東北開墾会社の片岡が本格工事開始、昭和八年完成。これが現在の美田につながっています。

その紆余曲折の中に、安久鉄次郎の活動があったことがわかってきました。田村から鉄

次郎への権利譲渡の書類も見つかつています。鉄次郎と片岡との関係を説明出来たら、「開拓者の系譜②」として報告したいと思つています。

平太郎の訴訟から二百二十年、女川左岸段丘の開拓を夢見た人々の系譜が、脈々とつながっています。

民具が語る生活史 民具⑦ランマ(欄間)

歴史館の収蔵庫に、ランマ(欄間)が3点保管されています。晩春に、女川郷、上新保集落の横山又四郎家の子孫の方から寄贈されたものです。



欄間 (部分)

上新保は、万治元(一六五八)年にはすでに「新保村」として記録があります。集落の南台に、又四郎(横山姓)の碑が建つていて、「し

ようにんさま」と呼ばれているそうです。その碑には「真海上人（しんかいしようにん）、元和6（一六二〇）年没」と記されています。初代又四郎が真海上人であり、本庄（村上市）から来てこの地を開拓したと伝えられているのです。「海」の号を持つ上人なので、出羽三山を篤く信仰している在家の方であったとも、修行者であったとも考えられます。

横山又四郎家は新保村のリーダーとして、江戸時代には百姓代や庄屋を、明治に入ると女川村長を務めました。現在子孫の方は他出していますが、その地に又四郎家母屋を移築して住まわっていました。

そもそも欄間とは、天井と鴨居（かもし）または長押（ながし）の間の小壁に設けられた彫刻や格子をいいます。室内の通風・換気・彩光・装飾などの目的で作られました。欄間は奈良時代の寺社建築で彩光を目的に取り入れられたのがはじまりで、平安時代には貴族の住宅に採用され、江戸時代には庶民の住宅にも広まったとされています。

欄間には彫刻欄間、透彫（すかしぼり）欄間、箴（おさ）欄間、組子欄間、障子欄間などの種類があります。例えば、美術館巡りで観覧した石川雲蝶の手による欄間（西福寺、石動神社など）や、村上を代表する木彫り堆朱の名工、有磯周斎の手がけた欄間は、彫刻欄間の代表的な

物ではないでしょうか。最近、有磯周斎の欄間を観る機会がありました。光が差し込んだときに壁に映る影まで計算された、素晴らしいものでした。

今回寄贈された欄間は、透彫欄間です。透彫とは、彫刻の種類で、金属、板、石などを表から裏まで通るようにくりぬいて、模様を表わす彫り方で、欄間の他には刀の鏝（つば）などに見られる技法です。厚さ10〜12mmくらいの板に、様々な形を透かしに彫られています。

欄間について教えを乞うため、大島集落の建具職、須貝文英さん実際に見ていただきました。すると、この透彫欄間が作られた当時は電動イトノコなどがなかったので、ひとつひとつ手作業であり、一枚板なので失敗することは許されず、かなりの腕の職人でないとこの欄間が作れなかったのではないかと。どの家でも作られたわけではなく、このような欄間が残っていることは貴重だ、ということでした。

また、誰が手掛けたものかも気になっていたのですが、須貝さんによると、職人は自分の名前を表に出さないものだったということで、製作者は不明です。

3つある欄間の内、特に手が込んでいるものには、欄間の外枠に家紋がデザインされています。横山家の誇りとともに、名前を面に出さない職人の粋を感じます。

日本家屋に住んでいる方は、どうぞお自分の家の欄間を今一度見直してください。渡邊家の欄間も、じっくり観ると興味深いものがあります。日本人の生活の知恵は、なかなか優れており、またそれぞれの職人の技に驚かされます。

（田村舞子）

参考文献

広報せきかわ編集室編一九九二「上新保」『ふるさと自慢誇記』関川村民具学会編一九九七「らんま（欄間）」『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・くつちえ

「腹くつちえ」は腹いっぱいだという意味の方言。長たらしい講演会で「もうくつちよなってきた」と言えば「もう飽き飽きしてきた」ということだ。「くつちえ」は「くちい」の転訛したものだろう。「暑い」が「あつちえ」になるのと同じ転訛だ。「くちい」は広辞苑では「苦しいほど腹がいっぱいである」と簡単な説明だが、三省堂の「新明解国語辞典」には「東北・関東方言」と補足がある。但し、その他の辞書にも「飽き飽きした」という意味は載っていない。私に最も「くつちよ」なる話をするのはK氏で、一つは飯豊の梶川尾根で舞茸を取り、縦走中ずつと舞茸汁を食った話。ガスコンロで大火傷をした女性を飯豊本山から大日杉まで一人で背負って降ろし、それからまた自分の荷物

を取りに登った話。剣岳で難儀している女性の面倒を見て、その女性が生涯の伴侶となった話。出鱈目でなく実話なのだろうが、「くつちよ」なるほど聞いたので私自身が体験したように話すことができる。最近この「くつちよ」なる話を聞かないで済むのは、芍薬園で忙しいからだ。沢山立派に咲かせるようになるまでには何年も掛かるという話で、頗る有難い。(安久)

モノ言つもの・殉国者銘板

明治維新後の日本は世界情勢の中で戦争を繰り返した。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争、太平洋戦争。殉国者と題されたこの銘板はもともと関小学校にあったらしいが、現在当館で保管している。

「明治廿七八年役」(日清戦争)「明治廿七八年役」(日露戦争)「大正三年乃至九年役」(第一次世界大戦)「昭和三年支那事変」(日中戦争の発端)で亡くなられた十二名の名前が刻まれている。

関川村ではこの戦争で四百数十人が亡くなった。現在の我々と同様、夢を持ち家族を持ちながら死んでいった人たち。その死によって残された家族の人生も変わり、その悲しみは生涯癒えることはないだろう。供養塔(忠魂碑)は戦後、旧関谷村のものは中学校の坂に、旧女川村

のものは上野新に移された。昭和五七年、関川村遺族会が二つの忠魂碑の傍に殉国者の芳名を刻した碑を建てている。我々の現在は彼ら村民のかけがえのない人生の犠牲の上にあることを忘れてはならないだろう。(安久)



殉国者銘板

歴史館行事の報告

○夏の美術館巡り「信濃川大河津資料館、朝日酒造」7月2日(土)総勢35名

○夏の健康登山「蔵王山」7月23日(土)総勢34名

○歴史講座① 9月15日(木)、「関川村のインフラの歴史〜電気・電話〜」について、佐藤忠良さんに教えていただきました。

○十三峠歩きと宿場巡り④高鼻峠と小国宿9月17日(土)、総勢28名

○古文書解説講座(7月〜9月)進捗状況：与四良さんは京の名所をくまなく訪れています。

お知らせ

○村民ギャラリー「加藤美智子木版画展」開催中！
11月6日(日)までです。

○秋の健康登山 牟礼山 10月29日(土)です。

○朴ノ木峠と足野水宿巡り 10月16日(日)です。

○歴史講座②③ 講師：村文化財調査委員、佐藤忠良さん 歴史講座10月13日(木)、11月10日(木)、歴史館映像ホール、19時〜です。

○歴史講演会 講師：村文化財調査委員、渡辺伸栄さん「田麦掘割訴訟大騒動の真相〜黒幕村上藩に大泡を吹かせた平田平太郎の大願〜」10月20日(木)、村民会館大ホール、19時〜です。

いわかがみ

第九〇号 発行日令和四年九月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300